

予想可能な未来に備える

がん社会 を診る

中川 恵一

じレベルに戻りましたが、減少分を取り返すことはできていません。

20年、検診で見つかったがん患者の数はコロナの前より14%も減り、21年も減少が続きました。20年にがんと診断された登録数は19年より約6万件も減少していました。登録数の減少は初めてです。

早期がんはまず症状を出さないため、検診の自粛は早期がん患者の減少につながりません。実際、進行がんが増えて

いますから、今後はがん死亡数の増加も危惧されます。日本だけではありませんが、コロナに関心が集中した結果、がんへの備えがおろそかになってしまいました。

そもそも、日本は国としてのがん対策の遅れがめだちます。がんは細胞の老化と言ってよい病気ですから、高齢化でがんが増えるのは自明です。現在、年間のがん罹患（りかん）数は約100万人ですが、私が医師になった1985年当時の3倍にまで増えています。

法「がん対策基本法」が施行されたのは2007年、がん教育が始まったのは3年前の21年です。

地球温暖化の問題も同じです。昨年の世界と日本の平均気温は統計開始以来最高となりました。国内では線状降水帯をはじめとする極端な大雨が日常的になっていきます。世界的にも大規模な山火事や海面上昇による国土消失が大問題になっていきます。

言うまでもなく地球温暖化が背景にあります。産業革命以降の化石燃料の大量消費と温暖化ガスの増加から容易に予想された事態です。

私たちは、自らの生存を脅かす問題が現実的な姿を現すまで、対策を始めることができないうです。がんの予防や早期発見も、今を犠牲にして将来の健康を確保する営みと言えます。新年にあたり、御自身の健康や地球の将来に思いをはせてみてはいかがでしょうか？

新型コロナウイルスが感染法上の5類に移行後、初の新年を迎えました。

私のまわりにもコロナで亡くなった人がいますが、2020年1月に武漢で感染が始まったころ、ここまで世界を揺るがす事態に至ると思っていませんでした。まさに想定外の大事件でした。

コロナはがんに対しても大きな影響を与えました。がん検診の自粛で20年の受診者は3割減、21年も1割減となりました。22年はコロナ前と同じ



イラスト 中村 久美

高齢化は昨日今日に始まったわけではありません。65歳以上の人口が全人口の7%を超えた「高齢化社会」に突入したのは私が10歳だった1970年でした。当時から、人口の約3割が65歳以上という今日の事態は予測できたはず

です。しかし、がん対策の憲